

児童が自らの学びを見直し、 教師が指導を改善していく 学習評価のために



令和二年度から全面实施となった学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められています。その実現のためには、教師が授業の中で、常に児童の学びの状況を分析し、適時評価を行っていくことが必要になります。

学習評価を通して、児童が自らの学びを見直し、教師が指導を改善していくための工夫点について、そのいくつかをご紹介します。

①評価の観点の共有

「話すこと」や「書くこと」の単元では、教師がモデルを提示することがあります。

〈例〉

●活動のゴールとなる完成したリーフレットを提示する。

●理想的な話し合いの動画を視聴させる。
●修正すべき箇所を児童に指摘させるための誤った文章を提示する。 など

これらのモデルのよさや課題を児童に分析させ、どのように作ればよいのか、どのように活動すればよいのかなどのポイントを見いださせます。

児童が見つけたポイントを全体で共有し、そのまま教師や児童が評価の観点としてチェックリストに作成します。そうすることで、児童もポイントを意識して活動するとともに、自己評価や相互評価を行う際の観点となり、教師も同じ観点で評価していくことができます。

②児童が課題を選択する場の設定

学習したことを活用させる際に、児童自身に課題を選択させる場を設定します。

〈例〉

●教科書の伝記教材で学んだ読み方を生かし、自分が紹介したい偉人の生き方が伝わるエピソードを、伝記から三つ選んで紹介する。

●自分が伝えたいテーマの新聞を作るために、テーマに合った資料を選択して要約する。

●物語の中心課題を解決するために、次の授業で追究する問いを選択する。 など

ここで大切なのは、目標達成のために、それぞれの児童が、なぜそれを選択したのか、その理由について説明することです。自分が目ざすものに向かうために、自分にとって何が必要なのかを考えさせていくことは、自らの学習を調整しようとする姿であり、粘り強く取り組む様子とともに、「主体的に学習に取り組む態度」の評価へとつながっていきます。

③中間評価の場の設定

書いたり発表したりする活動の中で、自分の活動の修正をさせるために、次のような中間評価の場を設定します。

●教師が、児童の作文の下書きを分析して、誤りの多い点について学級全体で確認し、その観点を基に児童自身が推敲する。

●児童の途中段階の発表原稿や練習段階の発表等を、本人の理解を得たうえで配布したりみんなで見たりして、そのよさについて話し合い、各自で自分の原稿や発表を見直す。 など

中間評価の場を設定することで、児童のそのときの状況に応じた修正の方向や評価の観点について教師と児童が共通理解できるとともに、児童自身による活動の修正を促すことができます。児童が修正できた場合には、学級で教師がおおいに称賛し、児童により強く意識させるようにします。

④自己の変容を実感する振り返りの場の設定

単元や一単位時間の最後に、振り返りを書くことは、それまでの学びを見渡して、自分の考えたことを言葉に置き換えるとても大切な活動です。

その際、基本的な文章の「枠組み」を与えることで、書くことが苦手な児童も書きやすく、教師も評価しやすくなります（〈例〉参照）。振り返りを書かせたら、それを教師がどのよ

〈例〉

黒字が枠組み

今日の学習では、**課題**について、（ ）を考えながら話し合いました。
わたしは、最初に **結論** と思っていました。**根拠** から、**理由** と思ったからです。
授業で話し合うと、わたしの考えは、（**やはり・少し変わって・全く変わって**）**結論**。
理由は、○○さんの……という意見で、（ ）と思ったからです。

いずれかの言葉を選ばせることで、児童は、その時間の自分の考えの変容を見つめ、学びを自覚していきます。

教師は、児童がどのような根拠を基に思考・判断したのかを確認することができます。